

Title	編集後記 奥付
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.4 (1948. 4)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480401-0067">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480401-0067</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウェーバーとマルクスとの人間についての理念の相異において、いづれが正しいかを決定し得ないとすれば、人間の窮極の立場について二つの異つた見解が存在することになるから、人間が唯一の窮極の立場に立つもの即ち同類體であることは否定される (ibid., 214)。かかる結論においてレーヴィットは一般的なものと私的利害關係の統一といふヘーゲル的な意味における同類體 (ibid., S. 205) として人間を把握するマルクスを否定する。しかも人間が同類體であるか否かが、レーヴィットが指摘する兩者の人間についての理念の相異そのものであるから、レーヴィットは結論においてウェーバーを支持する。かく彼によつて支持されるウェーバーは眞のそれであるだらうか。

三

マルクスが人間を同類體としたことは、彼が經驗的方法の窮極において實踐を人間と自然との同一性において把握したからである。この點において、彼は模寫説をとる。しかしかかる模寫説は演繹的原理ではなく、事象に即して把握され、従つて實踐的檢證にさらされる。

ウェーバーの方法を特徴づける「理想型的概念形成の目的は一般に類的なものではなくて、逆に諸文化現象についての特質を鋭く意識させることである」(W. L., S. 202)。かかる類化されない個性的なものへの執着において、彼は模寫説と全く對立する。(W. L., S. 192)。ウェーバーが世界觀と階級利益と

の親近性を認め (W. L., S. 153) 且つ人間における機械的本能的なもの、決定的な重要性を認めながらも (W. L., S. 518) 即ちマルクスとの極大化された近似性にもかかわらず、而もマルクスと對立するといふ事態は、理想型と模寫説との對立において理解される。

しかもウェーバーの模寫説の排斥は「社會的行爲を諷刺的に理解する」(W. L., S. 508) ことを課題とする理解社會學において、「それが閉じ込められてゐるところの狭い範圍を意識して」(W. L., S. 518) なされた。かかる狭い範圍を脱しての現實の全體に對する態度においては、模寫説における統一を實踐の問題と解するならば、彼も經驗的方法における實踐の統一を否定しはしないだらう。

ウェーバーとマルクスとは共に事象に即して實踐を追究する。しかしマルクスにおいては研究對象はそれ自體事實であるが、ウェーバーにおいてはそれは思惟的形成物 (W. L., S. 166) であり、従つて體系の統一、理念の實體化は慎重に拒否されてゐる (W. L., S. 192) から、マルクスにおいては實踐は體系の統一として、ウェーバーにおいてはそれは體系をこえるものとして把握される。この故にマルクスの經驗的方法は體系的に既に事實性をこえてゐる。しかしウェーバーの經驗的方法は體系的には事實性を固守する。この點においてウェーバーにおいてマルクス以上の一層の哲學疎外の傾向を看取し得る。

編輯後記

歴史は發展の連続であると、ナボリの哲人ウイコは説いてゐる。何となれば、市民的世界は人間の創るところであり、そして人間の本性は到るところにおいて同一であつて、一撃を以て變じ得るものではないからであるといふ。更に彼は、論理的必然性が歴史の生成の必然性を創るといつてゐる。ここに彼の發展理論の裏付けがあり、深き思索の跡がある。

これ等によつてウイコがいहांとしたところは、民族の史的發展に普遍的法則を發見しようとするのであつた。然し、歴史の中に普遍的法則を見出さうとする企てに對しては、異議を挾まることが多いであらう。それだけに、彼の歴史哲學が民族心理學に近いといふ論證になる。

この普遍的法則といふ點を除いて、歴史は發展であるといふ時、かかる命題は目的論的契機を含むものとして難ぜられることもあらう。然し歴史は發展の連続なるが故に、ウイコ研究の第一人者たるクローチエの言葉、「すべての眞の歴史は現代の歴史である」が、再建されで行く。ここに、歴史についての青い鳥を見出す人は多い。

ウイコはその著「新學問原理」の中でいふ、「事物が如何に成立してゐるかの仕方は、その事物の性質が如何なるものかを説明するものであり、かかる説明が學問の本來の課題である」と。味ふべき深さを持つた言葉である。

(高村象平)

<p>昭和二十三年三月二十五日印刷 第四十一卷 昭和二十三年四月一日發行 第四號</p>	
<p><b>禁 轉 載</b></p>	
<p>東京都港区芝三田慶大醫學部内 發行所 高村象平</p>	<p>東京都港区芝三田慶大醫學部内 印刷所 川口芳太郎</p>
<p>本號定價 金二拾五圓 送料 一圓二十錢</p>	
<p>豫約購讀料 一年分 金三百五十圓(送料共) 半々年 金百七十五圓</p>	
<p>豫約購讀料は發賣所宛お拂込み下さい 誌代變更の場合は精算決濟致します 編輯に關する用件は發行所へ 營業に關する用件、購讀申込は發賣所へ願ひます</p>	
<p>東京都港区芝三田三丁目慶應義塾大學經濟學部研究室 發行所 慶應義塾經濟學會</p>	<p>東京都港区芝三田二ノ一 發賣所 慶應出版</p>
<p>日本出版協會會員 A二二〇一九</p>	

電話 東京都千代田區 神田區 山崎町三ノ九 日本出版配給株式會社